

---

# **黑白の輪舞曲**

ASH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒白の輪舞曲

### 【Zコード】

N4471L

### 【作者名】

A S H

### 【あらすじ】

ノアでありながらエクソシストの少女。

家族と仲間。離別と再会。破壊と生成。善と悪。未と完。無と有。

ノアとエクソシストの物語

D . g r a y - m a n のファンファイクション。オリ主の破壊と絆の物語

主人公リルアが成長と共に望む物は・・・。

## 第1夜 リルア・キャメロット（前書き）

DグレのFFです。

オリ主（女）が暴れまくります。

原作10年前から始まります。

主人公5歳で原作時は15歳です。

## 第1夜 リルア・キャメロット

仮想19世紀末 - - - - -

「キヤハハハッ。いたずら大成功！！」

「あははははつ 次誰にする？？」

黒鳶色の髪の5歳程の少女と紫紺色の髪の少女が階段に座つてく  
すぐすと笑いながら小声で話していた。

「う～ん、さつきはティックキーだつたから・・・」

「「千年公にしよう」」

二人の少女はにっこり笑うと千年公がいつも居る部屋に走つて行  
つた。

「もう、あなた達は元気が良すぎますね？」

いたずらは見事成功した。

しかし、それを見届け少女達が逃げ出そうとする時、扉から最悪のタイミングでティッシュキーが入ってきた。それによりティッシュキーに捕まり、千年公によるお説教となってしまったのだ。

「二つめの手筋は、おまかせです。」

「おい、お前等今度は何したんだ?」いつもよりお説教が長く感じるんだが」「

「『テイツキーと回り』と『」

「…………おいおい、千年公にあんな幼稚な事したのかよ」

「だつて他に思い付かなかつたんだもん」

「でもね。ティックキーの時よりもいい音鳴つたんだよお」

三人は白熱して段々声が大きくなつていつた。

「エリ、三人とも聞いてますか？」

千年公が青筋立てて聞いてきた

「「「」めぐなさい」」

「三人には罰を『えます』」

「ちよつと、何で俺まで・・・」

「口答えは許しません?」

ティッシュキーはうなだれた。

小声で「何で俺が・・・とかぶつぶつ言っていた」

「それでは三人にはイノセンスの回収に行つてもらこます?」

「本当に?」

「リルアも行つていいの?」

「ええ、いいですよ?」

「つてことは俺はお守りなわけね

「場所はロンドンです。

ジャック・ザ・リッパーとして有名になつてゐようがから行けば  
分かるでしょ?」

「たのめますね?」

「わかった～」

「僕もいこよお

「了解です・・・

「それでは、いってらしゃい？」

「「いつときま～す」「

「それじゃ、行つてきます

「あ。ちよつとティキポンは待つてください？」

「じゃあ僕達は準備してくるねえ

少女達はそつづり出て行つた

「それで、どうしたんですか？」

「それがですね、なぜだか嫌な予感がするのですよ。  
リアルちゃんとロードをよろしくおねがいしますね？」

「言われなくても解つてますよ。

あの子達は俺にとつても大切な子達ですからね

中央庁軍事機関 黒の教団本部 司令室

「今回の任務はロンドンです。

ジャック・ザ・リッパーと呼ばれる切り裂き魔がイノセンスである可能性があります。

行ってくれますか。ティエドール元帥」

「わかつたよ。ロンドンだね。行つてくれるよ」

「よろしくお願いします」

## ロンドン

今は夜。それだけでも不気味なのに辺りを覆う霧がよりいっそうに怪しさを引き立てている。

そんな夜に出歩く娼婦が一人。

(なに? 今日はいつもより霧が濃いわね。  
最近、物騒なのにやんなぢゅうわね)

娼婦はいつものように客を求めて路地裏に向かった。

娼婦はいつも自分が立っている場所に黒い影があるのを見た。

「あら、お客さん? ··· もやーーーーー! !

娼婦が居た場所には血だまりと肉魄だけが残つた。

リルアサイド

『ノア様）。見つけました～。見つけましたよノア様』

レベル2のAKUMAがティックキーに報告に来た。

「おつ～。そ～か。行くぞリル、ロード」

「「わかつた～」」

『「JETちダス』

ボク達はAKUMAに先導されて十字路にある家の上に立つた。

『あそこダス。・・・あれ? 3人増えています』

AKUMAの指差した方を見ると、霧の中に黒い靄と一人の人間が立っているのが見えた。

「ねえ、ティキー、ロード。なにあれ?  
黒い靄がイノセンスだよね~。」

だったら、あの人は? 殺されるの?」

「リル、黒い靄はお前の言ったとおりイノセンスだ。  
だが、あの人間はただの人間じゃない。  
あれはエクソシストとファインダーだ。俺達と敵対する者だ」

「あれが? 千年公が言つてた?」

「そうだよお

あいつ等は、弱いくせに僕等の邪魔をして来るんだよお  
せつかく作ったAKUMAもレベル1のうちに壊されちゃうんだ  
よお

まあ、それ以上に増えてるから問題ないんだけじねえ』

「じゃあ悪い人?』

「うーん。どうなんだろう

悪いのは神であつて、選ばれてしまつたあの人たちは謂わば、被害者なんじやないかなあ

どう思う? ティックキーは

「俺は俺等を攻撃してこない限りは悪いかどうかはわからんねえな立場によって見解は変わるからなあ」

「・・・よく分かんない・・・」

「無理して考えなくていいよお

リルアはまだ5歳なんだから、大きくなつたらでいいよお

「うん、わかった・・・」

「お?あれって元帥なんじゃねえーか」

「ん~見せてえ」

「ボクも見たい。みせて~」

ボクはおんぶしてくれていたティッキーの肩に顎を乗せて下を見た。

さつきいた人、枇杷茶色の髪の男の人はさつきまで持つていなかつた<sup>のみ</sup>鑿状の物を持って立っていた。

「なにあれ?」

「うんっとねえ。あればイノセンスって言つてえ  
僕等やAKUMAに攻撃できる有一の物なんだよお

ロードが話している間に枇杷茶色の男の人と—ジャック・ザ・リッパー『イノセンス』との戦闘が始まった。

初めはエクソシストの人が押していた。だけど、一瞬の隙を突いてジャック・ザ・リッパーがファインダーの人に攻撃を仕掛けた、ファインダーは瞬く間に細切れにされて人の形を成していなかつた。この戦いはエクソシストが勝つた。エクソシストが放つたジャック・ザ・リッパーそつくりの黒い靄がジャック・ザ・リッパーを倒したのだ。

「ありやりや、介入する暇もなかつた」

「今から奪えぱいいじゃん」

ティッシュキーとロードがそう話しているとき、エクソシストがボク達の方を振り向いた。それから、手に持つたイノセンスを見ると、おもむろにこちらに投げつけてきた。

「うわああ！？」

「ー・リル！？」

「どうしたの！？」

投げられたイノセンスは一直線にボクに向かってきた。

どんどんイノセンスが迫つてた

そのままボクの視界は暗転した - - - - -

ティキサイド

ジャック・ザ・リッパーとエクソシストの戦闘はエクソシストの圧倒的勝利となつて終わった。

「ありやつや、介入する暇もなかつた」

「今から奪えばいいじゃん」

俺達が呑気に話していると、一人だけまだ下を見ていたリルアが急に騒ぎ出した。

「うわあああー!？」

「ー・リル!?」

「どうしたのー？」

リルアの方を見ようと後ろを振り向く時、何かが目の前を通り過ぎた。

次の瞬間、リルアの方から衝撃がきた。俺の背中にぶら下がっていたリルアはそのまま手を離して屋根の上に落り立つ。

「リルア！？どうした！？」

リルアは右目を抑えてのた打ち回こっていた。

卷之三

卷之三

口=五かすぐに膚を出現せた

俺はこんな時に何も出来ない無力感と焦りに頭が真っ白になつた。

俺達は扉を通つて千年公の元に着いた。

「どうしたんですか陛下さん？」

「千年公。リルが……」

「はい？ ……」されは……」

「どうなの？」

リルアの眼を見たとき千年公の顔が変わった。  
今まで見たことのないような顔で尋常じゃないくらいに汗をかいていた。

「……リルアちゃんに、イノセンスが入り込みました……」

「……イノセンス……どうして……」

「おそれべく……適合者……なのでしょう……」

「……リルアはノアだよ……」

「イレギュラー……だからでしょ？」

「どうしてなんだ？千年公……」

「・・・リルアは第0使徒 無を司るもの。

あなた方も知つてのとおりノアも初めは普通の人間として生まれてきます。

しかし、この子は生まれながらにしてノアだったのですよ。生れ落ちたその時にはノアとして覚醒していたのです。」

「・・・やういえば、リルは赤ん坊の頃からここに居たような・・・」

「

「ええ。覚醒が分かつたので私が迎えに行つたのです。赤ん坊が覚醒していたのでびっくりしましたよ?」

「つまり、『リルア』とお

「つまり、14番田の時と同じように何が起らるか分からな」と言つことです」

「アハ」

「どうこの子がいるんだ?」

話がずれ始めたので軌道修正した。

リルアが苦しがってるのに呑氣の話なんかしてられない。

「おやぢく、今はノアの遺伝子とイノセンスが反発し合つてこるのでしよう。今はとにかく安静にしていろしか手はありません。」

自分の無力さがこんなに悔しいと思つたのは今日が初めてかもしない・・・。

2年後 - - -

リルアサイド

今日はボクの学校の入学式だ。

ボクは5歳のときに右目にイノセンスが寄生した。  
ノアの遺伝子とイノセンスが反発しあい1年程生死の境をさまよつ  
た。

一年程で反発が大人しくなつて最近では反発はなくなつた。

その間、皆には心配をかけたことを申し訳なく思つていたけど、歩けるようになるとみんなで散歩に行つたりして、これでよかつたのかなとか罰当たりなことを思つたりした。

だいぶ回復してきた頃にダークマター製の右眼と額半分が隠れる程度の仮面をもらつた。（ジャステビが基礎を作りティッシュキーが整形、千年公が着色、ロードがデザイン、後で飾りと言つてシェリルお父様が丸い赤い宝石を2つ着けてくれた）イノセンスの誤作動防止と言うことでもらつたけど皆が作つてくれたので大切にしている。

学校はロードとは違う学校に通うことになった。

ロードが一緒だと授業参観がかぶるとかいろいろショーリルお父様と千年公たちが拒否したからなんだけど、まあよかつたかなつて思つている。

制服は改造オッケーなので改造した。

ブレザーの左手の袖を長くして手が完璧に隠れるようにして中にフードつきの服、プリーツスカートのしたには右足のは忍者風スパツツ、左足には二一ハイ（これはロードとおそろいの縞々のやつ）靴はブーツで紐をぐるぐる巻きにする少し変わつたやつ。最後にお気に入りの扇子を左腕に付けて完成。

入学して1週間、皆がボクの眼の仮面を見てくるので、ニットボウをかぶつて仮面を隠すことにした。

リルア 12歳

今日はティックキーと一緒にAKUMAの様子を見に行つてきた。

レベル2のAKUMAにファインダーが殺された。

レベル2は結局、女の子のHクソシストに壊された。

女の子のHクソシストがファインダーのために泣いたのがなぜか  
気になった。

あの日からこなれこなれだった。

人間がどうしてあれこれ涙するのか。。。

凄く氣になつた。

ロードのことを話してみた。

ロードは「じゃあ、行ってみればエクソシストの巣」。リルアにはその資格があるからだ「じょうぶだよ」と言つた

分かるまで悩むのがボクだったから、分からるのは凄く嫌だつた。だからボクはエクソシストの巣に行くことにした。

思い立つたら即実行と思つて黒の教団に行こうとしたらロードに引き止められた。

「なに?」

「そのままエクソシストの巣に行つても無駄だと想つた

「じゃあどうするの?」

「リルにイノセンス投げてきた奴いたでしょお

そいつの所に行つた方がいい

「わかった。行つてきます」

「いつてらっしゃいリル。気をつけてねえ」

「みんなによろしくね～」

それから半年ほど世界を回つていたら、ボクにイノセンスを投げた奴に会えた

その人の名はフロア・ティエドール。

元帥という地位についてイノセンスや適合者に会つために世界を回っているそうだ。

それでボクは適合者としてティエドール元帥と旅をした。

ティエドール元帥は絵を描くためにいろいろな地で足を止めたが、どの地も暖かく気持ちのいいところだった。

ノア一族を出て3年、ティエドール元帥に会つて2年半の月日が  
つた。

僕の力が安定し始めた頃に師匠が教団に行つてみないかと言つた。

元の目的はこれだつたんだが、なんだかんだで師匠の元が結構楽  
しかつたので少し寂しかつた。

師匠から貰つた絵を持つてボクはエクソシストの巣『黒の教団』へ  
『』向かつた。

## 第1夜 リルア・キャメロット（後書き）

リルアとロードが仕掛けた幼稚ないたずらはブーブークッションです。

次からは教団に行きます。

## 第2話 黒の教団（前書き）

アレンが教団に着く1～2週間前の出来事です

## 第2話 黒の教団

「よーしょーー！」

リルアは今、崖を上っている

何でかつて？それは、崖の上にボクの手指してゐる黒の教団がある  
らしいからだよつ

たのしみだね～

「よーしょー！」

でもさー。さすがにこれは無いんぢやないかな。

何だよこの高さある崖ー頂上が雲に隠れて見えないよつ

「 もういひつけーー！」

リルアはやつと急激斜面から抜け出す」とが出来た

リルアが上りきつた感慨を込めてエクソシストの巣、黒の教団を見上げた

そして、固まつた。

「これが、エクソシストの巣？」

黒の教団はその名のとおり真っ黒だった。

「うちの方が悪の組織っぽい。大丈夫かこの国！？」

「まいか。ひとまず入れてもらおう」

リルアは門らしき場所に向かつて歩き出した。

「なんだいこの子は！？」

ベレー帽にメガネを掛けた男がホログラムに映ったリルアを見て声をだした

「ダメだよ、部外者いれちゃあ～～～  
何で落とさなかつたの！？」

「あ、コムイ室長

それが微妙に部外者っぽくないんすよね」

ベレー帽の男コムイは幸薄そつな青年に向けて怪訝そつな顔をした

「お見せ兄さん」

ツインボーテの少女がコムイにある一点に注目するよう指で示す

「この子、ゴーレム連れてるの  
一般人がゴーレムなんて持つてないでしょ？」

『すみません。こんにちは～？』

「ニコエクソシストの總本部で聞いてきたんですナゾ、会つてます。おじ様が一応、紹介文書いてくれたんですけど、幹部の方と謁見できますか～？』

「おじ様って誰だ！？」

「紹介つて言つてますけど室長どうですか～？」

「う～ん、どうしようか？」

「兄ちゃん？何悩んでるの」

「いや、おじ様つてだれなのかな～とね  
一応あの二が敵じゃないのは分かってるけど念には念を入れないとね」

ツインポーテ少女他全員がその言葉に頭をひねる中、コムライは言った

黒の教団 門前

しばらく待つていると男の声が周りを飛んでくる「ウモリ」のような「ゴーレムから聞こえてきた

『後ろの門番の身体検査受けて』

「へっ？」

後ろを振り向くと大きな顔が門柱に張り付いていた

「…………」

「…………どうも？」

一応挨拶はしておいた。人間関係の基本だからね

すると、門柱に張り付いていた顔がすごい勢いで近寄ってきた

『レントゲン検査！ アクマか人間か識別！－』

人面門柱はリルアにものすごい光量のビームを浴びせてきた  
リルアはその形相があまりにも怖くて動けなかつた。

『んん！？バグか？映らない……！？』

門番は不審に思つて足元から順に見ていった

『！？何だ、あれは……！？』

『こいつアウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！－！－！』

門番の声が教団内に響いた

「えー？」

『こいつ、なんねえ！仮面がアクマだ－アウトだアウト－！』

門番は汚らしく鼻水と涙を飛ばした

『こいつの仮面は真っ黒だ！！。レンタカルで埋めぬかれて真っ黒だ！！

それに、こいつ自体も映んねえ！

アクマ（カモ）だー！！』

「はうあつー？」

## 黒の教団 司令室

「なにい——！？」

『スパイ侵入。スパイ侵入！』

「おい、城内のエクソシストは・・・」

「だいじょうぶじゃ」

「神田がついたわ」

黒の教団 門前

門の上に人が立つた

その人は黒髪長髪でとっても綺麗な人だった。

でも、リルアを見る目は酷く恐ろしかった。

「一匹で来るとはいひ度胸じゃねえか・・・・・」

長髪美形さんは殺氣を纏わせていた

「へ？え？ちょっと待つて！？  
なにか勘違いを・・・・」

「ぞわつ

「・・・」

リルアは悪寒を感じ、とつさて神田の仮面を取った

リルアは刀を構え落ちてくる神田の姿を捉えた

「掌握 - 強制制御 - -」

神田はそのまま地面に着地した。

「…・・・どういってんだ？」

神田は自分の体が動かないことに困惑しながらリルアに聞いた

「ボクのほうがどうこうことなんだけど、

それは、ボクのイノセンスの能力。相手を思つままに操ることが出来るんだ」

「イノセンス？」

「うん、そう。」

リルアが微笑みながら答えると神田は眼光鋭くなつた

「門番！-！-！」

神田は怒鳴つた

『いあつでもよ。中身がわかんねえんじゃしじうがねえじゃん！  
アクマだつたらどーすんのー?』

門番が怖い顔を歪ませながら弁解した

「ボクは人間だよ！ちょっと特殊なだけだもん！！」

リルアは門番に食つて掛かつた

『ギャアアアア近よんなあ——』

リルアと門番が騒いでいる中、神田は一人静かだった

「ふん・・・まあいい  
中身を見れば分かることだ」

神田はやつまつと対アクマ武器を発動させた

「！」の 六幻 で切り裂いてやる

神田は急加速してリルアに迫つた

「まつて、これ見て！おじ様からの紹介状っ——」

神田は喉に突き刺さる寸前に刀を止めた

「おじ様？誰だそれは」

「フロワ・ティエドールおじ様・・・」

「なに？」

「えっと、おじ様はあつちには手紙を出しておくよつて。コムイつ

て人に宛てに・・・」

黒の教団 指令室

リルアの言葉に司令室にいる人間はコムイをじつとーとした眼で  
見ていた

「そこの君！」

唐突にコムイは一人の中年を指差した

「は、はい？」

「ボクの机調べて！」

コムイは「ごみダメのように書類が乱雑に置いてある机を示した

「アレをスッカ・・・

「コムイ兄さん」

ツインボーネ少女が呆れていた

「コムイ室長・・・」

幸薄そつな青年も呆れた視線を送っていた

視線に耐え切れなくなつたのかコムイは紹介状探しを始めた

・・じばらくして

「あつた！ありましたあーー！」

ティエドール元帥からの手紙です！」

手紙はぼろぼろのよれよれだった

「読んでー！」

コムイは手に持つていた書類をばら撒いていった

『コムイくんへ

リルアという子が近々そちひこいくと思つので中に入れあげてね

ちなみにあの子に何かあった場合許さないのでよろしく

BY ティエドール

「はいーそういうことです。

リーバー班長、神田君止めて」

「たまには机整理してくださいよー！」

幸薄そうな青年リーバー班長は悲痛な声を上げた

「神田攻撃をやめるんだ」

「リナリー準備手伝つて。久々の入団者だ」

黒の教団 門前

《かつ開門～～～？》

門番声と共に門が開いた



「ティエドール元帥との子か  
今回はどんな子なんだろうね」

コムイは期待に満ちたまなざしでホログラムに映るリルアを見て  
いた

### 第3夜 入城

『入城を許可します。

リルア・キャメロットさん』

大きな音と共に扉が開いた。

だけど、喉にあてられたまま刀ほ引かれない

『待つて待つて神田くん』

「コムイカ……どういふことだ」

『ごめんね——早とちり！

その子ティエドール元帥の弟子だったみたい  
ほり、謝つてリーバー班長』

『オレのせいみたいな言い方しないでください！』

『そこのゴーレム。見たこと無いけどこんな持ってるの一般人じ

やないよ

その子は僕等の仲間だ』

神田ほまだ納得していなか難しい顔をしている

神田の頭にいつの間にか来ていたツインポニテの少女の拳骨が振り下ろされた

-バコッ

「もーーー  
やめなさいって言つてるでしょ！  
早く入らないと閉門しちゃうわよ」

神田が渋つている

「は・い・ん・な・せ・い！」

渋々神田が歩き出した

『閉門――――』

門を入ると教団の入り口に入った

「私は室長助手のリナリー

室長の所まで案内するわね」

「よひしへ～」

僕達が挨拶してると神田が立ち去りつつある

「あ、カンドさん・・・」

ボクが呼びかけるとギラッとした眼を向けてきた

「・・・ええ～と、ティールおじ・・ティードー元帥の弟子、リル  
ア・キヤメロットです。  
よろしくお願ひします」

戦々恐々しながらやつて

「・・・神田ユウだ。あの人のよしみで口へりに聞いてやる・・・」

「

神田はそれだけ言うとスタスターと歩いていった

「リルアちゃんす」いね～。

神田が初めから好意的・・・、って訳じゃないよね。さつきは切  
つてかかつたし、不可抗力だけど・・・  
ま、まあ任務直後だったし・・・」

「新入りか・・・」

「おつ美少女じゃないか?」

「なんだ、まだガキじゃないか」

僕達が回廊を歩いているとそんな声が聞こえてきた

「あの髪色、珍しいな。灰銀か?」

そうボクの髪の色は少し珍しい。元から珍しい黒鶴色だったんだ  
けどイノセンスが入った時に色が変わってしまった。理由は良くわ  
かんないみたい

「アクマがどうとかいう話だが・・・」

「大丈夫かよあんなガキで・・・」

「まあイノセンスに年齢、性別はかんけいないからな」

ボクはリナリーに教団内をいろいろ案内してもらひながら移動した

「エクソシストは皆ここから任務に向かうの  
だから、ここのこと、「ホーム」って呼ぶ人もいるわ」

ホーム・・・家族の場所、ボクにとつて家はあそこだけ。家族も  
あそこのみだけ・・・。

「はーい、ビーカーもあ

科学班室長のコマイ・リーです！

歓迎するヨリルア

いやーさつきは大変だったね～

「　「　「　「だれのせいだ」　「　「　「

至る所から怒声が挙がった

歩いてこるとふと気になる部屋を見つけた。

「あの、コマイさん。あの部屋なんですか？」

「ああ、あれね。あれは・・・」

「わあ―――兄さん―――わないで、トラウマになるから―――」

結局ボクがこの部屋の用途を知るのは遠い未来ではなかつた

「ところでリルア。君のイノセンスはどんなのなんだい？見せてくれるかな？」

大きなエレベーターに乗つて降下しているときにコムイが聞いてきた。

「別にいいよ。ボクのイノセンスは眼にあるんだよ」

いつも付けているダークマスター製の仮面をはずす

瞬間。ボクの視界は大きく、より鮮明にかわった。

「瞳孔が十字になっているね、眼は見えているのかな？」

「ボクのイノセンスは何でも視ることが出来る、普通の人間では見ることも出来ない風や空気とか光とか闇とか後は未来や過去。生き物の感情、思いなどもね」

「へえ、それは凄い。でも、それじゃあ前線タイプじゃないんだね？」

「そうでもないよ？前線でもやつていける自信はある、けどね偵察や密偵が向いているのも確かだよ」

「わかった、うちには偵察見たいな事出来るのは、マコくらいしかいないでね。みんな派手で・・・。」

「マコさん？ティールおじ様が言っていたボクの兄弟子さんだよね。」

「

「ティールおじ様？ ティードール元帥のことかい？」

「うふ、 そうだよ。」

「ティードール元帥はいい人だよ、 弟子は少々個性的だけどね。  
そうか、 ティードール元帥の所にもついに寄生型が現れたんだね」

「寄生型？」

「寄生型。 それはね、 装備型と違つてイノセンスの力をもつとも発揮できる選ばれた存在なんだ」

その時、 頭上から無機質でノイズ交じりの声が聞こえてきた  
『それは、 神のイノセンス全知全能の力なり

また一つ・・・我等は神を手に入れた・・・』

上を見上げると五つの影があった。

「ぼく等のボス、 大元帥の方々だよ

さあ、 君の価値をあの方々にお見せするんだ

「はへ、 どうこう・・・!？」

気配を感じて後ろを振り向くと薦のよつたものがボクの背後にあつた。

「うひわあーー！」

ボクは薦のよつなものは手のよつな感じで本体は龍のよつな体に顔は人のよつだつた

薦のよつなものは手のよつな感じで本体は龍のよつな体に顔は人のよつだつた

《イ・・・イの・・・イノセンス・・》

薦のよつな手はボクの右目に迫つてきた

右目にあるイノセンスはわざとコマトイに見せるために外したままだつた

薦のよつな手はボクの右目に触れると中に入つてきた

「なあー? うへえ・・・やめる、気持ち悪い・・・」

どんどん奥に入つてくる感覚にボクは力が抜け頭痛と嘔吐感に呑まれた

それでも必死に抵抗しているとコマトイが笑いかけながら言つた

「無意味に暴れない。  
君の十字架はとてもすばらしくヨリルア

どうだいへプラスカ？

この神の使徒は君のお気の召すのかな?」

きもちわるい気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

はなせええええええ～～～！！

《こ、こら・・・暴れないでくれ・・・

安心して・・・私は・・危害を加える・・つもりは・・ない

発動は・・・対アクマ武器と・・適合者が・・ちゃんと・・・シン  
クロしてなければとても危険なんだぞ・・・

•  
•  
•  
•  
5  
%  
1  
7  
%  
•  
•  
•  
3  
9  
•  
•  
5  
7  
•  
•  
8  
4  
•  
•  
9  
6  
%  
!»

ヘプラスカが眼から手をぬきだした。

それと同時に気持ち悪さが消えた。

『突然・・・こんなことをしてすまない・・・

ビーチや砂浜・・・今の君の・・・最高シンクロ率は・・・96%のよ

だ』

「びっくりした・・・」

『おどろかすつもりはなかつた・・・

私はただ、君のイノセンスに触れ、しりつとしただけだ・・・』

「・・・イノセンスを知る?」

『リルア・キャメロット・・・

君の力は、未来への鍵となるだらう・・・

さまざまな思惑の中で、鍵は未来へと繋ぐ・・・

私はそう感じられた・・・・・・・・

それが私の能力・・・』

「鍵・・・?」

「凄いじゃないか～～～～～

ヘプラス力の予言はよくあたるんだ  
リルアにはきたいできそうだね～～』

『コムイが手を吊しながら近寄ってきた

「コムイさん・・・」

- - バキヨツ

「ぐへえ！」

「いきなりでびっくりしたよ。」

「ごめんね、突然的に手が出ちゃったよ」

ボクはコマイの顔面に拳をめり込ませた

「謝るなら、殴らないで・・・」

「小さいながらの報復だよ」

「し、しかたないんだ・・・」

入団するエクソシストはヘブラスカにイノセンスを見てもう一つ規則なんだ

「じゃあ、初めに言つてよー！」

「まあ、これで君のはれてエクソシストだ

ようこそ、黒の教団へ」

そして、ボクとコマイさんは握手を交わした

「現在エクソシストは19人となつた

ほとんどは世界各国に任務で点在しているがその内含めるだらう

ちなみにヘブラスカもエクソシストだよ」

『お前達とは少し違うが・・・

私はキュー<sup>ブ</sup>の適合者・・・

イノセンスの番人だ

・・・リルア・・・君に神の加護があらん!』とを・・・』

### リルア自室

「ふにゅ～～～」

ボクはベットに寝転がった

今日はいろいろなことがあったなあ〜

神田ユウさん、リナリー、コムライさん、ヘブさん・・・

分かるかな?ボクは知りたいんだ知らないことを・・・わからな  
いことを・・・

「みんなまつててね?

答えを見つけたら、必ず帰るから・・・

だから、ずっとボクの家族でいてね？」

それすらボクには分からない……。

ボクが探すのは何なのか……。

導き出したものは、正解か、不正解か……。

この出会い、これからのお会いの意味を……。

ボクはまだしらない……。

ボクが何者で、何の為に生まれてきたのを……。



### 第3夜 入城（後書き）

次に任務に出ます（多分・・・）

それから、あれん登場です

## 第四夜 初任務

『リルア、リルア。 我がいとし子。

共に在れんことを許しておくれ・・・。

おまえを助けてやることが出来んことを許しておくれ・・・。

不甲斐無い我を許してをくれ・・・リルアよ・・・』

「うう～ん

今のは・・・?

夢、かな・・・?

リルアは今、戻された部屋で目を覚ました。

さつき聞いた声は、懐かしかった。ずっと聞いていたい声だった。

あの声は誰の声・・・?

分からぬ、分からぬ。

でも、きっと大切な人の声だよね・・・？

「今日も一日が始まるよ、おはようみんな・・・」

今日もリルアは一人つぶやく、家族への挨拶をすると、一匹のゴーレムがリルアに近寄つていった。そして、葉っぱの様な羽でリルアの頭を強烈にビンタした。

「あはは、わかつてゐよ。  
おはよひ、ルーフ。」

リルアが微笑みながらそういうと、ルーフと呼ばれたゴーレムは羽と尻尾？をバタバタと動かして挨拶を返したようだ。

-----  
ぐううう

リルアとルーフのお腹から同時に鳴った。

「ふふふ・・・。  
そういうえば、晩御飯食べずにねたよね。  
・・・でも、不思議だよね～。ルーフはゴーレムなのに、飯が食べられるんだから

千年公がそういう風に作つたのかな？」

ルーフはぐるぐると旋回して肯定の意を示した。

「それじゃ、食堂にレッヅゴーーー！」

リルアの部屋は教団の方の階にある。

食堂まで歩いて行つていたら相当な時間がかかる。

なので、リルアは時間短縮のために手つ取り早い手に出た。

「う～ん。だいぶ下だけど大丈夫だよね？」

リルアは眩きながら、階下に落ちないようだと設置されたである手すりに手を掛けた

「せ～のー。」

リルアは掛け声と共に手すりを乗り越えた

ひゅ～と効果音がするであらつ勢いでリルアは落ちていった

落ちていくリルアを発見した教団の者達は一様に慌てた「子供が落ちていく」と。

落ちていいく、落ちていいく。リルアはどんどん加速しながら落ちていく。

「のぐらいかな～？リルアはそろそろかとあたりをつけルーフに  
？まつた

ルーフに？まるごとこよつてリルアは減速していき最後にはリルアはルーフに？まつて飛んでいる状態になった。

「ルーフ、この階で下ろして

ルーフはリルアの願いどおりに食堂のある階に下りした。

「ありがとルーフ。

それじゃあご飯だ〜！」

「いらっしゃい、まて！」

リルアとルーフが食堂に向かつて足音高々に歩き出したら静止する声がかかった。

リルアが首だけを180度回転させて後ろを振り向くと、般若の顔をした神田が息も荒くこひらて走ってきた。

「うはあー！な、なに神田さん・・・？」

「リルア・・・てめえ今何してやがった？」

「食堂に入るうつと・・・」

「ちがうだろーお前は食堂に向かつたために何処を通りてきたのか聞いてんだよ」

「えっと、近道であそこを・・・」

リルアは普段はエレベーターが浮遊している中央部をさした

「ああ、そうだな。

それで、お前があそこを飛び降りたと俺に知れせがきた

「えっと、どうして神田さんに知れせがいったの？」

「俺が知るか！」

つまりだな、あそこは緊急時以外使つな。緊急時なら誰も咎めない

い

神田は注意とこづかお説教といつかよくわからないとを言った。

「うん、わかった。今度から気をつけよう

あ、神田さん良かつたら一緒にいい飯食べよ？

一人と一皿で食べるのは寂しいからね～

「ふん、仕方がないな」

「やつた」

あ、ここの一メニューってどんなのがあるの和食つてあるのかな～

最近和食食べてないんだよね～

「和食か？

ジローの和食はうまいぞ」

「ほんと、じゃあこいつぱい頼もつかな

「ああ、たくさん食べるの悪い」とじやねえ

神田に付いて受付に行つた

受け付けは変わつた形をしていた。

ぼ～と見ていたら中から暑苦しくない程度に筋肉の付いたナイスクガイが出てきた。

「あんまり、神田くんじやないの今日の『注文はなー』に・

あらん？ 後ろの子は誰？

あんまりまあ、かわいい～！ 長髪三つ編みがまたとつてもキュート！～あ、長髪がおそろいね！？かわいい～わ！  
もしかして、あなたが噂の新入りちゃんかしり～や～ん、かわい～妹に欲しいわ。どうもしよかつたら・・

・・ぐううう～

ジョリーが尚も話づけよつとしているリルアと神田の腹がなつた

「あ、ごめんなさいね。話に夢中になっちゃた。  
といあえず、皿口紹介はしておきましちゃうね。私は料理長のジョリーよ。ジョリーねえつて呼んでね。  
で、あなたは？」

「僕はリルア。リルア・キャメロット 15歳 好きな料理は日本食だよ。よろしくね、ジョリーねえさん」

「うふふ。かわいいわ～。

で、『注文は？腕こよつをかけて作るわね』

「俺はそれがいい。」

「僕はねえ。掛蕎麦にきつねうどん、おでんに味噌汁、白米に沢庵その他ある漬物がたべたいな～」

「女の手こじては量が多くわね。食べられる？』

「うそ、あ、おかわりって出来るの？』

「ええ、出来るわ。それじゃ待つてね～』

「はーい。リルアチャケンさん！神田町。お待ち下さい～』

「あつがとう、ジヒリーねえ。こただきまゆ』

「ふふふ、残りすくべ食べてね～』

「うそ、わかってる、

「神田さん、早くたべよ～』

「座れてよかつたね神田さん

では、いただきますー。」

「・・・いただきます・・・」

リルアが楽しそうに飯を食べているとお盆を持ったリナリーがこちらに気付いた。

「あ、リルアに神田。

一緒に食べてもいい?」

「いいよ。

リナリーは何頼んだの?」

「私はね、中華よ。あとデザートにチョコレートケーキ」

「中華にチョコは合わない?」

「そんな事ないよ。チョコはなんにでも合つだから」

「ええ~・・・」

「そんなことよりも、リルアと神田は仲が良いわね。

神田がこんなに早く馴染んだのは始めてだよね」

「ふん。知るか」

「神田さんはいい人だからね~」

リルアたちが和やかに会話していると、食堂の入り口にリー・バー  
班長が走りこんできた

「お、いたいた。神田、リルア任務だ。

飯食い終わつたら、室長室に来てくれ。」

「早速任務か？」

「ちつ めんどくせえ」

「ふふ、仕方ないわね。

早く食べていきましょ。私も兄さんに用事があるから一緒に行く  
わ

## 第5夜 団服と変態

死誘桜

死を予期する桜。死を誘う桜

ある日、一人の老人がなくなつた。老人はこの辺りでは有名な偏屈物だつた。

老人がたいそう大切にしたのは一本の桜の木だつた。

老人は昔、遠い国から流れてきた者で、その時の持ち物は小さな木の苗木だけだつた。

老人が死んだ日、辺りは真っ白になるほどの大雪だつた。そんな日にあの桜の木は花を咲かせた、それは、一輪や二輪ではなく満開だつた。

それから不思議なことが起こりだした。その光景を見たこのあたりに住む住人が桜に触れたすると見る見るうちにその住民は80代のようによぼよぼになり死んだ。

それから、桜は何人の死に立ち会つた。

「・・・というのが、今回君達に行つてもうらつ任務なんだだけ。  
いつてくれるかい？」

室長室によばれたリルア、神田そしてリナリーはコムイに任務について説明を受けていた。

「・・・で？場所は何処なんだ」

「うへんと、場所はねえ。何処だっだけ？  
あ、思い出したよ。スペインの端の方の町だよ

「スペインだな。分かった  
行くぞ、リルア」

神田はリルアに声をかけると室長室から出て行つた

「うふ、わかつたよ

じゃ、リナリー、コムイせん、バイバイ

リルアは神田の後を追い出て行つた。

「バイバイ、だつてさ。行つてきますといつてもうえなかつたね～

「うそ、いつかは言つてやるよつなるよな

「まあ当分は無理そうだけじゃね～

「どうして？」

「あの子、すつじく周りを警戒していたからね  
それが、取れない限りここはあの子のホームにはなれない」

- 地下水路 -

「暗あ、じこすいへ暗いね  
あんまり好きじゃないな～」

「ふん、すぐに慣れる

リルアと神田が船に乗りながら話をしているとコムトイとジニアー  
がこちらに走ってきた

「いや～良かつたよ間に合つた」

「どうしたの？」

「リルアの団服。

渡すの忘れてたから焦つて持つてきたんだよ」

「団服？』

「ああ、神田さんが着ているのと同じやつのこと？」

「うん、まあ少しひつアレンジしてあるから厳密に同じとは違つんだけどね  
はい、リルアのはこれだよ」

リルアに渡された団服は袖の右が七分で左が十三分になつていて丈の右がひざ辺り左が腰辺りのコートとミニスカートとヒーハイとパンプスに編み上げの紐がひざ辺りまで来る物だった。

「うわあ、ありがとお  
着替えてくるね〜」

リルアは着替えるためにいったん船を下りた

「…お前らの将来が、少し心配になつてきた…」

神田の言葉にコムトイジニーが固まつた

「い、いや、神田。アレは少し趣味が入らなかつたこともないけどリルアの要望を出来る限りいれるとああつた結果であつて…・・・

「だまれ、変態…」

神田のこの一言でジョニーとコムイは心に深い傷を負つた  
すると、そこへ着替えを終えたリルアが戻ってきた

「あれ?どうして一人とも沈んでるの?」

「気にするな」

ひつして神田とリルアは任務へ行つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4471/>

---

黑白の輪舞曲

2010年10月15日01時54分発行